HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	古代メソポタミア文学における冥界 ： 古代ギリシア・ローマの冥界観を視座に
著者	桑原，俊一
引用	北海学園大学人文論集，23・24：65-86
発行日	2003-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

古代メソポタミア文学における冥界
── 古代ギリシア・ローマの冥界観を視座に ──[1]

桑　原　俊　一

キーワード：冥界，宇宙論，比較神話学

はじめに

本稿では古代メソポタミア[2]の精神文化における冥界の観念や文学的モチーフを素材としながら，語族を異にする古代ギリシア・ローマの冥界観がメソポタミアとの交流によって構築されていった可能性を探る。とりわけ古代ギリシアは早くからシリアやメソポタミアさらにはエジプトとも交易による文化的交流があったことは既に知られている通りである。古代メソポタミアの文学，つまりシュメール・アッカド文学は古シュメール語期（前 2500－2200 年）から後期バビロニア期（前 400－100 年）の 2000 年以上にわたる文学の伝統をもち，しかも東地中海諸国と西アジア全域にわたって流布した一連の文学群が確認されていて，それらの冥界描写はきわめて多様である。本稿ではメソポタミアの冥界の入口に関するモチーフを仔細に検討し，その概要を明らかにしたい。そうすることで，古代ギリシア・ローマの冥界観が西アジア起源である根拠を補完できるものと考える。

そもそも冥界への関心は観念的にも，儀礼的にも入口と不可分に関わっている。なぜなら「死者の国」への旅立ちにしても「生者の国」への帰還にしても冥界との接点は基本的に入口をめぐる問題に帰結するからである。したがって数多い冥界を主題にしたメソポタミア文学の中でも冥界の出口に言及するものは極めて限られる。つまり入口論にこそメソポタミア文学の冥界モチーフはほぼ包摂されるものと考えられる。

1．古代ギリシアとローマ帝国時代の冥界観

メソポタミアに限らず，ほぼいかなる民族も墓の中の冥界[3]という観念を共有している。死者たちは狭い墓所から抜け出して共同生活をする。地中海世界の場合，古代ギリシアやローマ帝国時代まで墓は大地の下に広がる冥界への扉であり門である。冥界の死霊たちは墓所を通してその後も地上の人々と交流を行う。とりわけ人々は死者の墓所に赴いて供物や飲み物を捧げて死者供養をする。ローマ人がエトルリア人から借用した儀礼として地上世界と地下世界を繋ぐために市が築かれるとき，市の中央に穴が掘られ，供物を投げ込んで死者の霊と交流を回復したという[4]。冥界についてのローマ神話は他の神話と同様多くをギリシア人から継承した。冥界へ降下するという主題[5]は驚くほど忠実にギリシア人からローマ人に伝えられた。前6世紀に定式化した冥界描写は考古学的発見からも明らかである[6]。死後，霊魂は冥界に下っていくと，とりあえず仮の住まいに拘留される。冥界の領域は地上の都市の反映であった。橋のないステュクス川によって地下界の都市は境界線をもつ。亡霊たちは渡し守カロンとその舟によって冥界の王国へ導かれる。王国の入口には三つの頭をもつ番犬ケルベロスが警護している。王国は冥界の王プルトン（ハディス）と女王プロセルピナ(ペルセポネ)が支配する。裁判官としてミノス，その兄弟ラダマンテュスとアイアコスがいる。死刑執行人は正義と復讐の女神たちエリニュイスである。一本の道が法廷に続く。冥界の岐路には裁判官が座わる。罪びとは左手に向かうことになる。断ち切れない鎖で繋がれた罪人たちは高い壁に囲まれた牢獄タルタロスで法の定めに従い苦しみを受けるが，右手を取る善良な市民はエリュシオンの快楽の園で自由を満喫する。このような古代ギリシア・ローマの冥界にかかわるモチーフや素材はいわゆる古代の末期まで継続された[7]。

ここに概観された冥界描写の素材の多くが古代メソポタミア文学に起源することは既によく知られている。中世史学者のハワード＝パッチはその著書『来世』の中で中世文学に描かれる冥界に関する素材やモチーフを整

理し，一覧表にしているが，メソポタミアの神話体系からは「橋」を除くとほぼ全ての要素が取り込まれているとされる[8]。この類似の妥当性については，ギリシア・ローマの神話とメソポタミアのそれとを比較する場合に，デュジメルのインド＝ヨーロッパ語族の「三区分的イオデオロギー」ないし「三機能体系」が考慮されるべきである[9]。確かに言語レベルにおいてはインドとギリシアの資料の比較は検証可能ではあるが，精神文化や神話の比較ということになると，古い言語資料の多くは極めて断片的である場合が多く，インド＝ヨーロッパ語族間の神話を比較し，論考するには不確かな要因が大きすぎるきらいがある。結論から言えば，ギリシアの置かれた地理的位置がインド，ローマ，ケルトなどに見られる神官を頂点とする三身分の社会階層を形成しなかった大きな要因であろう。つまりギリシアは地中海の東に位置し，早くからエジプト，シリア，メソポタミアなどとの海洋貿易が盛んであった。その証左の一つをアルファベット文字の伝播と分岐に認めることができよう[10]。さらにエジプトとの交流も早くから行われていたという文化的遺産がインド＝ヨーロッパ語族のなかで古代ギリシアに非インド＝ヨーロッパ的特殊性を付与したことは想像に難くない[11]。したがって冥界の叙述に関する限り，ギリシア・ローマの観念やモチーフはメソポタミアと概ね共有されていた。その理由は既に上述したように海洋貿易や隊商交易によってもたらされた文化的接触と変化の結果であったと考えられる。古代ギリシアの非インド＝ヨーロッパ的性格について検討することも興味ある課題である[12]。

2．古代メソポタミア文学における冥界の入口について

冥界描写の入口に関連するモチーフに的を絞って論考を進めることにするが，先ずメソポタミア文学とはここではシュメール語とアッカド語で書かれた神話や叙事詩などの一連のテキスト群に限定したい。確かに文化・文芸活動は前3000年期のシュメール人によって，前2000年期には主としてセム語系の民族によって担われてきた。しかし既に前3000年期にはセム

系民族は南メソポタミアに移住し，宗教や神々は両者の間で事実上混交していたのが実態であった[13]。したがって前2000年期以降の文学のなかに多くのシュメール語による神話・叙事詩が伝えられていて，シュメール語文学とアッカド語（東セム語）文学に言語上は区分されるにしても，われわれが取り扱う冥界にかかわる作品群を区別する必要はないといえる。古代メソポタミアと呼称される地域の膨大な粘土板文書のうち，とりわけ神話や叙事詩，讃歌を手掛かりに，冥界の入口について検討を加えたい。広範なジャンルをもつシュメール・アッカド文学のなかでも冥界を主題とするものは意外に多い。冥界そのものを舞台とする文学もあれば，間接的に触れるにすぎないものもあるが，代表的作品を枚挙するとすれば，シュメール語の『イナンナの冥界下り』，『ギルガメシュ，エンキドゥ，冥界』，『ドゥムジの死』や『ギルガメシュの死』などがあり，他方アッカド語で書かれた作品に『イシュタルの冥界下り』（アッカド語版『イナンナの冥界下り』），『ネルガルとエレシュキガル』，『エラの叙事詩』，『アッシリア皇太子の冥界の幻』などが挙げられよう[14]。

これらの文学に総じて言えるのはこれらの文学の著者（書記）が決して冥界それ自体の全体像を描写しようとしてはいない。むしろ彼らはわれわれが期待する意味で冥界を物語ることはしなかった。その限りにおいて，これらの文学から古代メソポタミアにおける冥界観を仔細に再構成することはほぼ困難であるといえる。時代と地域とを越えて，「不帰の国」に対する多岐にわたる多様な描写こそが古代メソポタミア文学を豊穣なものにしている。換言すれば，この冥界の叙述の多様性なるものが冥界の文学的モチーフに個性と特徴を与えているといえよう。著者たちが叙述する冥界テキストはそのほとんどが冥界それ自体というよりはその入口をめぐって展開されることに注目したい。論理的帰結といえようが，そもそも「不帰の国」との関係はその接点をどこに見出すかにかかっているからである。したがって，ここでの検討課題は各文学の概略や注解は必要に応じて最小限にとどめ，文学が言及する冥界への入口の多様性を精査し，古代メソポタミアの人々の精神世界が紡ぎ出した冥界の入口を検証することにある。

文学群から概観できる入口は，七重の城壁に囲まれ宮殿の門や扉，エディンやアラリと呼ばれる遠く離れた荒野，小舟で川（海）を下った地の果て，墓所，東の水平線（山脈の稜線），クサ（Kutha）などの特定の都市，地界に続く穴や梯子など多様である。主題の性質からして，入口に比較すると出口の描写は殆んどなく，入口と同じ道を辿る観が強い。もちろん神々といえども自由に冥界に行き来できなかったし，人間にとっては二度と帰還の許されない「不帰の国」であった。

さて上述の冥界への入口の枚挙をして単にシュメール・アッカド文学における冥界描写の多様性とすることはできまい。単なる冥界の入口に関する羅列に過ぎなくもないからである。そこでS. N. クレーマーのことばを借りるとすれば，冥界の叙述は混沌としており，互いにあい矛盾するとさえいいうるだろう[15]。当時の都市国家をそのまま反映する冥界の素描もあれば，都市の外延に広がる荒涼とした荒野を冥界描写の中心に据えている文学作品もある。葬送儀礼の観点から地界真下に広がる冥界を叙述するもの，宇宙論的に果てしない深遠を冥界とする作品も存在する。したがって文学それ自体から冥界の入口に関する概念を一般化すことは許されない。

実際，シュメール・アッカド文学における冥界概念はその語彙の豊富さに多くを負っている。旧約聖書を含む古代オリエント文学の中でもその豊富さにおいて際立っている。言い換えれば，その語彙の豊かさゆえにシュメール・アッカド文学における冥界概念を際立たせるものにもし，同時に把握し難いものにもしている[16]。語彙論はさておき，多様な文学から看取できる様々な冥界の入口に関する描写を個別に精査し，個々のモチーフを検討することにする。

3．神殿・宮殿

シュメール・アッカド文学は既に都市国家として発展していた経済社会を前提とする。われわれの取り扱う文学テキストはほぼ古バビロニア期（前1900年－1600年）以降に属していて，前3000年前後に成立するシュメー

ル都市国家を冥界の叙述に借用したとしてもごく当然のことであった。シュメールの典型的都市は市街と郊外さらに特定の商業地から構成されていた。市街は最も古い地域で，城壁が回されていて，一つ以上の門が配置されていた。都市の神殿や宮殿さらに行政機構は城壁内の門の周囲に置かれ，市民の集会などが開催された。城外には耕地が広がり，都市の生活を支えていた。農耕地や牧草地さらに羊や牛の囲いなど続いていたが，どの程度の範囲を指していたのか確かではない。商業地の中心は埠頭をもち，この地域には法的にも独立した外国商人が住みついていた[17]。

一例として，ここでは北部メソポタミアの都市アッシュールに言及するにとどめよう。この都市はチグリス河の二つの支流に囲まれた地点に開かれ，二つの城壁で防備されていた。もっとも外側の城壁は元来の城壁に後になって築かれたものである。センナケリブの時代（前704－681）都市はこれらの城壁に13の門が据えられていたという[18]。

天上においても地下においても神々の住まいは都市生活者の世界を反映する[19]。死後の世界を都市として描写する典型的作品に『ウルナンムの死』[20]がある。この作品が描く冥界では神々それぞれに宮殿があてがわれている。すなわちネルガル，ギルガメシュ，エレシュキガル，ドゥムジ，ナムタル，ニンギシュジダ，ディムピメクとニナジムアの宮殿である[21]。ウルナンムは冥界に入ると個々の宮殿を訪ねて，神々に贈り物を差し出す。神々に加え，冥界の裁判にかかわるアヌンナキ神団も公邸[22]を所有していたに違いない。

とりわけ『イナンナ（イシュタル）の冥界下り』において冥界の女王エレシュキガル[23]の宮殿は七重の城壁と門[24]で要塞化され，その通路は中庭へと続く。門には門番が配置されている。大門番はピティである。

イナンナは，ラピスラズイリの宮殿に近づいたとき，
冥界の入口で悪事を〈企んだ。〉
冥界の宮殿に向かって悪い言葉を叫んだ――
「門を開けなさい，門番よ，門を開きなさい。門を開けなさい。私一人，

（中に）入りたいから。」[25]

七重の城壁と門からなる構成物は「ガンジル門」[26]，「エレシュキガルの門」[27]，「不帰の門」[28]，また「大門」[29]などと呼ばれ，冥界の入口を特徴づけている。『ネルガルとエレシュキガル』ではエレシュキガルの中庭は冥界への入り口の一つである。門番としてピティ，キシャル，エンダシュリンマ，エンウルッラ，エンドクガ，エンドゥシュバとエンヌギギがその任に当たる[30]。これらの叙述を整理すると次のように纏めることができよう。冥界の女王エレシュキガルをはじめ冥界の神々は堅固な城壁で要塞化された都市に宮殿を構え，城塞は幾重にも回されていて，それぞれ門番が監守していた。

門は後述する山や川とも関係する。太陽神は大地の彼方に位置する二つの門，つまり「日没の門」[31]を通り，「日の出の門」に向かうと考えられる[32]。『ギルガメシュ叙事詩』においては蠍人間が太陽の門を見張っている。

山の名前はマーシ［ュ］
［彼が］マーシュの山に着［いた］とき，
それらは日毎に［日の］出を見張っていた。
それらの上部は天の基底部に［触れ］，
下では，その胸がアラル（冥界）に達していた。
蠍人間たちがその門を見張っていた。[33]

門は冥界の川に隣接している場合がある。川は門の前に位置するのか，後置されるのか明確ではないが，ダムテキスト『ダムと姉妹たち』の叙述によると冥界の川の流れは門で閉ざされることから，前に置かれていたと推測できる[34]。

女神は宮殿の前で来客に挨拶をする一方，他方では玉座に座して判決の執行にあたる。中庭は法廷としても機能していた。多くの作品のなかでアヌンナキ神団が裁判官であり行政官であった。彼らはエレシュキガルやネ

ルガルの法廷に参与する。もちろん裁判長はエレシュキガルやネルガルである。その他『ギルガメシュ叙事詩』はアヌンナキ神団に加えマミートゥム[35]の法廷に言及する。太陽神ウトゥ（セム神シャマシュ）とナンナ（セム神スエン）も裁判官として挙げられる[36]。死者とともに冥界には贈り物が携えてこられる。それらは書記によって書き記された。『ドゥムジの夢』の中でドゥムジの妹ゲシュティナナは「書記，歌手にして言葉の意味を知る者，夢を解き明かす者」と言われる[37]。さらに同じ作品の中で「冥界の大いなる書記」としてでてくる[38]。『ギルガメシュ叙事詩』の中ではベーレット・ツェーリ「荒野（冥界）の女主人」が書記としてエレシュキガル女王の前に跪いて冥界にもたらされた贈り物を大声で読み上げる[39]。

4．梯　　子

「天の長い梯子」を使って天と冥界の間を行き来する描写がスルタンテペ版『ネルガルとエレシュキガル』に見られる。神々が天上で祝宴をもうけたとき，彼らの姉妹エレシュキガルに使いのものを送る。神々の姉妹といえども冥界と天界を行き来することは容易でなかった。ご馳走を天から冥界の女王に受け取らせるために，神々の使いが天からも冥界からも送られるが彼らは「天の長い梯子」を使って上り下りをする。

> ［わたし（アヌ）が彼（エレシュキガルの使いのものナムタル）に与えるものを……］あなたに［とどけさせなさい］』。
> ［カカは長い］天の［梯子を降りていった。］[40]

この梯子はアヌの門から冥界の門に達していたと思われる。ナボポラサールの碑文[41]は「ガンジル（冥界）の梯子」に言及している。

テキストの破損した箇所ではあるが，『ウルナンムの死』において，王は死後「戦車」に乗って冥界に下る描写が認められる[42]。ウーリー卿によるウル王陵の発掘ででてきた乗り物と比較できるかもしれない。

5．山（山岳）

都市から離れた荒野の外延に山々が位置する。都市文明から切り離された山々は冥界の入口と理解された。二重の意味で冥界の入口と考えられたのである。一方で，地理的に文明の届かない荒野[43]は部族社会では悪霊の出没する冥界であった。他方，太陽神が出入する場所を冥界の入口とする見方は，他の古代世界と同じように，古代中近東においても，太陽と門と山々は一体化されて，地上界と地下界を区別する一つの入口とみなされていた。典型的例として，門の内側に双子山が描かれ，その間から太陽神シャマシュが勝ち誇る王の有様をして片足一で方の山頂を踏みつけている円筒印章（アッカド様式，紀元前2300年～2200年BM89110[44]）がある[45]。地理的に言えば，確かにポタミアの場合，太陽は北東のザグロス山脈から昇り，小アジアのタウロス山脈を経て地中海に沈むことになる。太陽神は西の水平線，つまりは冥界の入口で審判を下した後，夜の間は自らの寝室で休息を取る。東の方角に位置する山岳で目覚め，寝室を出ことになるが，ここが冥界の出口ということになろう[46]。

これに呼応して『イナンナの冥界下り』の中のKUR「山」[47]の用法は類似した視点をもつといえる。ここではKURは儀礼的文脈においても北東の山岳に位置する。つまり，イナンナはウルクを出立して，北東の方角から西に向かって都市(バドティビラ，ザバラム，アダブ，ニップル，キシュ，アッカド[48])を巡礼する。北東の山岳地帯に沿って西の方角に旅を続け，夜には西のクサに没して休息を取ることになる[49]。

『ギルガメシュ叙事詩』においてもギルガメシュは東方の巨大な双子山マーシュの山を越えてウトナピシュティムを尋ねる。これに関連して，ギルガメシュ叙事詩が叙述する冥界への入口から出口に至る描写は不明瞭である。親友エンキドゥの死を知ったギルガメシュは悲嘆にくれる。彼は永遠の生命を求めて旅立つことになる。その道すがら，巨大な双子山マーシュを通り抜けなければならない。山中の大門が開かれる。地界の暗闇を通り抜けて，光輝く楽園に出ることができた。

「ギルガメシュよ，［彼（ウトナピシュティム）のもとに行く道］はない。
この山を行こうとしても，誰も［通り抜けられない。］
［その］中には12ベール（約120キロメートル）も［闇が続く。］
……
［11ベールに達したとき，］彼（ギルガメシュ）はシャマシュの前に出た。
［12ベールに達したとき，］明るさがもたらされた。[50]

しかし山中の大門を過ぎて，どこを通り光あるところに出ることができたのか明瞭に記述されているわけではない。その理由としては文脈それ自体の描写が漠然としており，全体を把握することが難しいことに加え，古代メソポタミア文学そのものの中にこれと平行する記述が見当らないことなどによる。したがって，この部分の描写が「地下大通」（地下道トンネル）に言及しているのかいないのか，テキストそれ自体から確定するには困難が伴う。しかし東地中海の山岳に多く見られる洞窟がギルガメシュの通り抜けた暗闇であった可能性は捨てがたい[51]。

6．川（河）

冥界への道程は必ずしも渡河を前提とするものではない[52]。しかし，川が冥界の入口と関連して用いられていることも事実である[53]。その叙述や描写には多様性が認められる。冥界の川が入口として描写されるテキストは，いわゆるダム神テキストに典型的である。姉妹は舟に乗り先を行くダムを追い，川岸に沿って冥界の川を下っていく。姉妹は必死にダムと連絡を取ろうとするが無駄であった。ついに冥界の門に至る。ダムが門をくぐるととたんに閉されてしまう[54]。他方，舟で冥界に旅をするダムは縛られた囚人として描かれる。舟旅は冥界で終えるのだが，エレシュキガルの息子[55]がダムを解放する[56]。

『ギルガメシュ叙事詩』の場合，ギルガメシュはウトゥナピシュテムに会うためマーシュの山を通り抜けて，宝石と果樹の光り輝く海辺に辿りつくと，そこで顔を覆った酌婦シドゥリに出会う。彼女は「死の海」[57]を渡らなければならないこと，そして渡し守ウルシャナビに案内してもらうように忠告する。「死の海」がギルガメシュとウトゥナピシュテムの間を阻んでいる。

「ギルガメシュよ，決して［そこに］入る術はない。
いにしえより，誰もその海を渡らなかった。
その海を渡るのは英雄シャマシュのみ。
シャマシュの他には，誰も渡らなかった。
渡航は困難をきわめ，そこに至る道はさらに困難だ。
その間には死の水があり，その前方を遮っている。
その海のどこを，ギルガメシュよ，渡りおおせるというのです。
死の水に達したら，あなたに何ができるというのです。……」[58]

『ウルナンムの死』によれば，ウルナンムは渡し舟[59]を使い，逆巻く川を横切って冥界に下る。

［・・］何処とも知れず，舟は沈んだ。
［・・］堤防で，水路の傍らで，舟は真っ二つに裂けた。
［・・］舟の櫂と舵はばらばらに砕けた。
［・・］船室の内側は粉砕され，錠前も砕け散った。[60]

荒々しく流れる川については幾つかの文学が言及している[61]。とりわけ冥界の入口を逆巻く嵐として叙述するのは『ドゥムジの死』で，豪雨と疾風が冥界の入口を取り巻いている[62]。他方『ギルガメシュ叙事詩』における「死の海」の描写[63]はむしろ不気味な静寂を漂わせているといえよう[64]。

川の位置については主要な作品が川を門の直前に置いている。死者は冥

界の門に向けて川を渡らなければならない[65]。それに対し『エンリルとニンリル』では門の内側に川を置いている。ニンリルは「主門」を通り抜けて，「冥界の川の人」と邂逅するのである。メソポタミア文学全体からすれば，川は門に隣接し，接合していたと考えられる。ただし他のテキストによると川は「アヌンナキ門」と「囚人の門」の間を流れていて[66]，一定してはいない。

渡河の情景についても二通りの叙述が見られる。つまり川を横切るか或いは川の流れに沿って下るかのいずれである。『ギルガメシュ叙事詩』は明らかに「死の海」を櫂で掻きながら航海していることから，「死の海」を横断することになろう。ダムテキストの『ダムとその姉妹たち』では川岸に沿って冥界に下っていく。

川下りにも二類型が確認できる。舟で水流を下る場合と舟に乗せられず川面を下る場合とである。前者はダムテキストに見られるが[67]，後者は末期的病にある肉体が川面に浮かんで下るさまを描写する『使者と少女』に見て取れる[68]。

渡し守については既に言及した。『ギルガメシュ叙事詩』ではウルシャナビの名ででてくるが，『アッシリア皇太子の冥界の幻』においては渡し守の名はフムッタバル[69]である。舟はシュメール語でマグル舟(アッカド語でマギル舟）と呼ばれる[70]。

川の名称についてはシュメール語作品には発見できないが[71]，アッカド語テキストにはフブルの名で出てくる[72]。

7．荒　　野

荒野という語彙が常に冥界ないし冥界の入り口を意味するわけではない。しかし，その意味の範囲は荒野や荒涼とした砂漠をも意味することから，冥界の環境との類似性が認められ，冥界の入り口ともされる[73]。冥界としての荒野はしばしばドゥムジが登場する作品のなかにでてくる。ドゥムジ崇拝は耕作地域と牧草地域との間に広がる砂漠を取り巻く都市バドティ

ビラで行われた[74]。悪霊たちや野獣も出没するところであると同時に，未開人や奴隷の住まう遠方の地として叙述されもする。したがって「沈黙の家」[75]や「山賊の家」[76]の名称で呼ばれたりする。

一般的にドゥムジテキストの文学伝承における荒野は悪霊たちがドゥムジを追跡する場所である。ドゥムジはそこで拷問を受け，死にいたる。彼の死を悼む嘆きの歌が詠われる。

わたしの心は荒野で彼（＝ドゥムジ）のために嘆きの葦笛を吹く。
若者が捕らわれ，住まわれるところ，
ドゥムジが束縛され，住まわれるところ，
わたしの心は荒野で彼（＝ドゥムジ）のために嘆きの葦笛を吹く。[77]

ダムテキストによれば，荒野は関所や牢獄[78]として叙述されることもある。これには囚人として川を下るダムが対応しよう[79]。

8．墓　　所

「穴」を冥界の入り口とする概念は一義的には大地に穴を掘り死者を埋葬する儀礼と関連する。『ドゥムジの死』においてドゥムジはガッラ霊たちに追跡され，ついには荒野で埋葬される。墓所の周りは嵐のように風と雨が吹き荒れ，そこに入るやいなや戻ることの許されない冥界の力が作用する。確かに墓所は冥界の入り口である。語彙論からも「穴」は比喩的に冥界の意味でも用いられた[80]。『ギルガメシュ，エンキドゥと冥界』の作品では，冥界への「穴」を通してエンキドゥの死霊が現れでて，ギルガメシュと冥界についての対話をする[81]。悪霊は冥界への「穴」や「「割れ目」[82]を通って出没もする。この関連で死者供養のための「導管」[83]も比ゆ的に冥界に通じる入口のひとつとして用いられた[84]。

9．罠

『ドゥムジの死』には冥界の入り口に仕掛けられた「罠」[85]がでてくる。主題としては『ドゥムジの夢』などの作品に見られる「欺き」と関連していていると思われる。悪霊から逃れようとするドゥムジの居場所を結局は友人が教えてしまう[86]。冥界への入口に仕掛けられる以上，「罠」にしても「欺き」にしてももはやそこから逃れ得ない「不帰の国」を示唆する。

10．ク　　サ[87]

特定の地理的な領域を冥界の入口とする場合がある。クサはバビロニアの北に位置する都市の名称である。シュメール語ではグドゥアであるが，冥界の神々であるネルガル，エレシュキガル又はラズ[88]（ネルガルの配偶神）崇拝の中心的都市であった。したがってクサそれ自体が冥界の入口とされる[89]。さらに冥界において全ての死者が集まるところがクサでもある[90]。アラリの荒野やウルクも冥界への入口と考えられる。

おわりに

古代メソポタミア文学，ここではシュメール・アッカド語による冥界にかかわる主要な文学作品に限定して，冥界への入口の叙述に焦点をあて検討した。その結果，明らかになったモチーフは現世の都市環境をそのまま冥界に置き換えたものを始めとして，宇宙的山（山岳）や川，荒野，墓所，梯子，穴，罠，クサ（都市名）等である。これらの文学的素材は古代ギリシア・ローマの冥界叙述と並行するところが多い。この事実は古代ギリシア・ローマ世界の冥界観はその起源を西アジア，なかんずく古代メソポタミア文学の影響を受けた結果であると想定される。

シュメール・アッカド語による文学の冥界への入口の叙述は整理すると概ね三類型に集約できよう。(1)都市とその構成を色濃く反映するもの，(2)

地理的関連から取り扱われるもの，さらに(3)儀礼と関係するものである。つまり(1)『イナンナ（イシュタル）の冥界下り』に代表されるように，「城壁」，「門」，「梯子」など都市の構造物が冥界にもあてがわれる。それに対して(2)ドゥムジ・ダム関連テキストでは，「山」，「川」，「荒野」，「クサ」など冥界の入口と特定された都市は地理的水平軸を中心に描写されたといえる。その他(3)「墓所」や「穴」は埋葬や死者供養という儀礼から説明できる。

注

[1] 本稿は2002年9月15日に開催された日本宗教学会第61回学術大会第8部会での口頭発表に基づいている。なお本稿は平成14年度北海学園学術研究助成による研究成果の一部である。

学術雑誌等略記記号は (1). *The Assyrian Dictionary of the University of Chicago*, ed. E. Reiner, et. al. (Chicago-Glukstadt, 1956-1991); (2). W. von Soden's *Akkadisches Handuworterbuch* (Otto Harrassowitz, 1965-1981.); (3). R. Borger's *Handbuch der Keilschriftliteratur* vol.1 (Berlin, 1967), 661-672.に準拠する。

[2] 中東，中近東，あるいはオリエント等，地中海の東とペルシャ湾の西にまたがるこの地域の名称については歴史的経緯からさまざまに呼称される。古代メソポタミアとは一般にチグリス大河とユーフラティス大河の間の領域を指し，ほぼ今日のイラクとその周辺域にあたる。

[3] 東地中海周辺地域とメソポタミアや西アジア地域では死者たちは明らかに地下界の大きな穴，つまり死者の国に寄り添い集うという観念を共有した。ヘブライ人のシェオールとゲヘナ，ギリシャアのホメロスに出てくるハディス（もともとは地下の神の名），ローマのインフェルノは後述するシュメール・アッカド文学が描写する冥界と酷似する。

キリスト教の時代になると冥界は様々な観念を含む地獄として把握されるようになる。したがって冥界そのものに多様な原語があてがわれる。『旧約聖書』には時代によって観念の相違が見られる。一般的に黄泉の国や陰府と訳出されるシェオールもその内容を変えていくことになる。ここではキリスト教や『聖書』の冥界観は本稿の主たる論題ではないため，その概略を述べるにとどめる。初期のシェオールはこの世の世界のおぼろげな再現に過ぎなかった。バビロン捕囚時代以降ペルシャからの影響のもとで終末論的発展をとげ，死者の復活の思想となる。『新約聖書』のハディスは死者の赴くところで，ゲヘ

ナは永遠の刑罰を受ける悪しき者が落ちる場所である。これは前2世紀頃のゲヘナ観を踏襲したもので,裁きが下る時まで暗闇の穴に閉じ込め置かれる。

地獄における苦しみは後カトリック神学の中で煉獄の教理にまで仕立て上げられることになる。

4 フランツ＝キュモン(小川英雄訳)『古代ローマの来世観』平凡社，1996年[原書1992年]，102頁。

5 後述するシュメール・アッカド語文学に典型的な主題である。シュメール版『イナンナの冥界下り』，アッカド語版『イシュタルの冥界下り』参照。

6 Emily Vermeule, *Aspects of Death in Early Greek Art and Poetry* (University of California Press, 1981), 71. Fig. 28-29.

7 フランツ＝キュモン，前掲書，101頁。

8 Howard Patch, *The Other World: According to Descriptions in Medieval Literature* (Cambridge: Harvard Press 1950), 10.；アリス K. ターナー（野崎嘉信訳）『地獄の歴史』法政大学出版局，1995年［原著1993年]，10頁。

9 ジョルジュ＝デュヂメル(村松一男訳)『神々の構造 ── 印欧語族三区分イデオロギー』国文者，1987年

10 拙稿「交錯することば ── 地中海文明と文字の伝播 ──」北海学園大学人文論集　第19号（2001年)，29-63頁参照。

11 ギリシア神話に登場する女神，アテナ，ヘラ，アルテミス，アフロディテなどは元来アナトリアやフェニキア起源であり，非インド＝ヨーロッパ語族系であるし，男神アポロンも非インド＝ヨーロッパ語族系である。ヘパイトス，ダイダロスについてもメソポタミアからの職人集団がギリシャに移入されたときに工巧神として持ち込まれたらしい。村松一男「神話に民族の分岐を見る ── デュメジル流の比較神話学的観点から ──」『言語』Vol. 29　No. 12 (2000)26-33。特に30-31頁を参照。一方，典型的なメソポタミアの女神で，シュメール神話に起源する女神イナンナは東地中海に広範囲に認められる。アッカド人の間ではイシュタルと呼称され，パレスチナ地方ではアスタルテと呼ばれた。『旧約聖書』の中では「恥」というヘブライ語の母音を取ってアシュトレト，アシュタロト（複数形）として出てくる。ギリシア神話ではアフロディテ，アルテミスとして登場する。ローマ神話にはウエヌス（英語読みで馴染み深いヴィーナス）の名で出てくる。

12 村松一男，前掲論文，31頁。

13 天の神「アヌ」，大気の神「エンリル」，生命の水の神「エンキ」（アッカド語のエア)は元来シュメール人の神々であるが,バビロニアやアッシリアの神々の系譜に受け継がれている。

[14] 個別の作品についての翻字や翻訳さらに解説については後述の作品やテキストを参照せよ。

[15] S. N. Kramer, "Death and Nether World according to the Sumerian Literary Text," *IRAQ* 22 (1960), 59-68.

[16] 語彙研究や旧約聖書における語彙との比較研究については拙論以下参照。"A Study of Terminology of the Netherworld in Sumero-Akkadian Literature (1-4)" 北海学園大学人文論集第 8 号（1997）1-35；第 11 号（1998），271-296；第 12 号(1999)，65-91；第 13 号(1999)，87-118；"A comparison of the Concept of the Earth in Sumero-Akkadian Literature and in the Old Testament," *AJBI* (1994), 45-58; W. Horowitz, *Mesopotamian Cosmic Geography*, (Eisenbrauns, 1998), 268-362.

[17] A. L. Oppenheim, *Ancient Mesopotamia, Portrait a Dead Civilization*, Revised ed. by E. Reiner (The University of Chicago Press, 1977), 115-116.

[18] S. Lloyd, *The Archaeology of Mesopotamia* (London, 1978), 179-181.

[19] 『アダパ物語』には天上の神の宮殿のアヌ門の門番としてタンムズとギッジダの名が挙げられている　39 行。なお杉勇訳『アダパ物語』は杉勇編『古代オリエント集』世界文学大系 1，筑摩書房，1977 年に所収されている。以下本書の言及は『古代オリエント集』とする。本書所収の文学に関するテキストの翻訳や校訂等はこれらの解説を参照。

天上における神殿の玉座に座る太陽神シャマシュ*ANEP*　図版 529 参照。旧約聖書にも一例ではあるが「天上の宮」に言及している　詩編 104：13。

[20] テキストの校訂と翻訳については S. N. Kramer,"The Death of Ur-Nammu," *JCS* 21 (1967), 104-122; C. Wilcke, "Eine Schicksalsentscheidunk für den toten Ur-nammu," *CRRA* 17 (1969), 81-92.

[21] 『ギルガメシュの死』にも同様な神々のリストがある　B 9-21 行。S. N. Kramer, "The Death of Gilgames," *BASOR* No. 94 (1944), 2-12; *ANET* 50-52 参照。

[22] Egalgina と呼称される。矢島文夫訳『イシュタルの冥界下り』，前掲『古代オリエント集』111 行。

[23] シュメール・アッカドの神々の系譜においてエレシュキガルはイナンナやイシュタルの姉にあたる。

[24] 後藤光一郎訳『ネルガルとエレシュキガル』，前掲『古代オリエント集』のアマルナ版では 14 の門が想定されている　裏面 20-25 行。

[25] 五味亨訳『イナンナの冥界下り』，前掲『古代オリエント集』72-77 行。Ganzir が語彙論的に冥界特に「冥界の入口」を意味することは明らかである *CAD G*

43b参照。なお原文翻訳に用いられる記号は次の通りである。[　]は原文の欠損或いは破損しているが，訳文は平行する箇所，頻出する箇所，ないし文脈から復元が可能な箇所を示す。〈　〉は文脈上の意味内容が理解困難な場合の直訳である。(　) 内は文脈からの翻訳である。

[26] 同上117行。

[27]『ネルガルとエレシュキガル』第1欄＊17行，第5欄18行。

[28]『イシュタルの冥界下り』12行。

[29]『エンリルとニンリル』66行，71-72行，75行。H. Behrens, *Enlil und Ninlil, Studia Pohl* 8 (Rome, 1978)。この書評についてはJ. Cooper, *JCS* 32 (1980), 175ff。翻訳についてはS. N. Kramer, *The Sumerians*, 145ff；H. フランクフォート，H. A. フランクフォート，ジョン A. ウイルソン，Th. ヤコブセン共著（山室静，田中明訳）『古代オリエントの神話と思想 ── 哲学以前』社会思想社，1973年［原著1947年］のTh. ヤコブセン「オリエント」の項，186-192頁参照。

[30] Col. III 41'-47'; 21-27。Pi_5-ti, Ki-šár, En-da-šurim-ma, En-uru-ulla, En-du_{13}-kù-ga, En-du_{13}-šuba, En-nu-gi_4-gi_4。『イナンナの冥界下り』ではピティは第1の門（主門）の門番として登場するが，門番長をピティとする作品に『二つの挽歌』(S. N. Kramer, *Two Elegies on a Pushkin Museum Tablet*, [Moscow, 1960]; A. Sjöberg, *JAOS* 103 [1983] 315-320）と『冥界の幻』(W. von Soden, "Die Unterweltsvision eines assyrischen Kronprinzen," *ZA* 43 [1936]; E. Ebeling, *MAOG* 10/2 [1937] 1-20; A. Heidel, *Gilgamesh Epic* 132-136 [Chicago, 1954]；E. A. Speiser, *ANET* [Prinston, 1955] 109-110; A. Livingstone, *State Archives of Assyria III, Court Poetry and Literary Miscellanea* [Helsinki, 1989] 68-76）が上げられる。その他『二つの挽歌』では門番の一人としてエタナも挙げられている。『ギルガメシュ叙事詩』(本稿の引用では月本昭男訳，岩波書店，1996年を用いた)にはエタナの住居が冥界に存在する。第7の書板　第4欄　49行。エジプトの『死者の書』によれば新たな死者はラー（太陽神）のボートに乗り込まなければならない。天の渡し守に付き添われて，昼の間に天の川をわたり，夜には川の西に着く。舟を降りると，七つの門を通過しなければならない。各門には門番が見張り，伝令者がいる。コーランは冥界を明確に叙述しているわけではないが，七つの門をもつ巨大な穴とみなしている。罪人はここで裁きを受け，その罪に応じて7層に分けられた場所のどこかに割り振られて住むことになる。(コーラン2：29；15：16；65：12；95：4-5)。天と地を二日間で分け，天を7層，地を7層に分けて整える。

[31] *CT* 16 9: 12 (*Utukku Lemnutu*)。*KLA* 90 によれば「囚人の門」と呼ばれる門も見られる（*TuL* 128: 5'-8'）。*CAD* K *kamû* B 127-128 参照。

[32] 注 30 参照。

[33] 第 9 の書板　第 2 欄　1-6 行。

[34] その他の川の位置については「川」の項を参照。

[35] 運命を割り当てる創造女神。第 10 の書板　第 6 欄　36-37 行。

[36]『二つの挽歌』89-90 行。

[37] 21-24 行。

[38] Dub-sar-mah-a-ra-li 21-22 行。E. Ebling, *ArOR* 21 (1953) p. 388 lines 66-69 参照。この名称は『ウルナンムの死』における^{d}Nin-na-zi-mu-a などにも付与される。『ドゥムジの死』89 頁参照。

[39] 51-52 行。

[40]『ネルガルとエレシュキガル』 I * 15-16 行。

[41] F. Al-Rawi, *Iraq* 47 4: 15.

[42] S. N. Kramer, *JCS* 21 114: 73-76.

[43] 後述する「荒野」の項を参照。

[44] ドミニク・コロン（久我行子訳）『円筒印章』，東京美術，1996 年［原書 1987 年］，43 頁，図版 103。*ANEP* 図版 683 参照。

[45] エジプトの死者の書にも双子山の山頂に観音開きの扉が据えられ太陽（表意文字で神を意味する）はこれを通して昇りまた没する。イスラエルの詩篇記者も朝の輝きと夕の薄明が門を通って日の出と日没となる様を描写する（詩篇 65：8）。

[46]『二つの挽歌』太陽神が入口から出口へどのように旅程を取るか問題がないわけではない。W. Heimpel, "Babylonian Beliefs Concerning the Actions of the Sun at Night," *JCS* 38/2 (1986), 127-151 参照。

[47] ここではシュメール語 KUR は明らかに冥界を意味する。

[48] イトゥルンガル（Iturungal）運河に沿って北西に進む *RGTC* 2 271.『イナンナの冥界下り』5-13 行。

[49] G. Buccellati, "The Descent of Inanna as a Ritual Journey to Kutha," *Syro-Mesopotamian Studies* 4/3 (1982), 3-5.

[50] 第 9 の書板　第 3 欄 8-10 行－第 5 欄 28-29 行。

[51] この問題は東地海全域にまで拡大して検証することが許されよう。
ヒッタイトのテキストは冥界の太陽神（太陽女神かもしれない）は「地下大道」を夜の間西から東へ交通しなければならない。ギリシャ神話の怪物を幽閉するタルタロス（元来は神々専用の牢獄として利用されていた）は頸長の

壷のような深い洞窟であったようである。ギリシア各地に存在する深く長い洞窟が冥界の入口とみなされた。僅かな訪問者であるが地底王国至るためは洞窟から入らなければならない。その一つが南ペロポネソスのマルマラに近いタイナロンの洞窟である。ローマ神話ではナポリ近郊の洞窟クーマイが地界への入り口とされる（A. K. ターナー，前掲書，42頁-58頁)。東地中海に散見できる洞窟や地下の大道といった地界深く続くトンネルが冥界への入口の一つと考えられていたと想定できよう。ギルガメシュの場合も周辺世界とテキストの状況から，「深く暗闇のトンネル」を抜けて，宝石の実をつける国に到達したものと思われる。実際イランとイラクに洞窟の存在は知られている。しかし，イラクに関しては，調査が困難なため，詳細なことは判っていない。*ATLAS Great Caves of the World*, Paul Courbon, et. al. (Cave Books, 1989)によれば，イランはザグロス山脈や，ケルマンシャ（Kermanshah)といった地域での洞窟の報告があり，もっとも深いもので75一メートル，長いもので1364メートルである。洞窟名を列記すれば次の通りである。

ghar Parau (Kermanshah)
ghar Shah Bandu (Kuh-i-Shahu, Kermanshah)
ghor-i-Cyrus (Kuh-i-Shahu, Kermanshah)
ghar-e-Morghan (Kuh-i-Parau, Kermanshah)
ghar-e-Mariz (Kuh-i-Parau, Kermanshah)
ghar-e-Boland (Kuh-i-Parau, Kermanshah)
ghar-e-Garun (Kuh-i-Garun, Kermanshah)
ghar Acker (Kuh-i-Parau, Kermanshah)
ghar-i-Shahu (Kyh-i-Shahu, Kermanshah)
ghar Shaban Kale (Kermanshah)

イラクについてはドゥカンダム（Dukan Dam)，大ザブ（le Grand Zab)，ディノック(Dinok)，ラワンディズ(Rawandiz)等の地名があげられる。1000メートル，800メートルといった長さの洞窟があるようだが，詳細は不明である。洞窟名をあげると次の通りである。

Useiba，Shanigar。

[52]『イナンナの冥界下り』や『イシュタルの冥界下り』など。

[53] 6頁参照。

[54] ダムテキスト2『ダムとその姉妹たち』。基本的テキストはZimmern, *SK* nos. 26, 27, 45; de Genouuillac, Premiere Recherches árchelogiques à Kish (Paris, 1924-5), vol. II. D 41, c. 8。関連するテキストと翻訳についてはTh. Jacobsen, "Religious Drama in Ancient Mesopotamia," in *Unity and*

Diversity eds., by H. Goedicke and J. J. Roberts (Baltimore, 1975), 65-97; *Treasures of Darkness* (New Heven, 1976) 63-67; and *Toward the Image of Tammuzu* (Cambridge, 1970) 324-327, notes 8-16 を参照。

[55] たぶんニナズ。*AN: Anum* (*CT* XXV 8, 8-15; *MSL* IV 9, 102-106)；『イナンナの冥界下り』86 行；*Gilgamesh, Enkidu and the Netherworld* 201; *Death of Ur-Nammu* 99; *Enlil and Ninlil* 116; *Ninazu Hymn in Enegi TH* No. 14 7 and in *Eshnunna TH* No. 34 20-21 参照。

[56] ダムテキスト 2。

[57] ここでは意味上「海（水）」も「川」も同義である。『ギルガメシュ叙事詩』における洪水物語（第 11 の書板）を参照。「死の海」は「冥界の海」とも表現される『イナンナとドゥムジのエルシェンマ』114-115 行。ギリシア神話では死者の霊魂はステゥクスの川を渡らなければならない。この川にはたいてい四本の支流が注ぎ込んでいる。

[58] 第 10 の書板　第 2 欄　21-27 行。

[59] 冥界の川を渡るためと思われるが，ナムタルにはウルナンムからマグル（MAGUR）舟が与えられる。マグル舟についてはメスラムタエアとグガルギッラ讃歌おいて大洪水のなかを進む舟として出てくる。アッカド語ではマギル舟，『ギルガメシュ叙事詩』第 10 の書板　第 3 欄　47 行参照。

[60] 66-69 行。

[61] ドゥムジは舟で冥界に向かうが，舟は冥界の水で大破する『エルシェンマ 97』114-115 行。荒れ狂う激流に舟は打ち付けられ，沈められてしまう『ウルナンムの死』66-70 行。エンキは荒れ狂う嵐の中を冥界に舟を出す『ギルガメシュ，エンキドゥと冥界』14-26 行。ダムテキストにおいても類似の描写が見て取れる。つまり川の流れがあまりにも速いために姉妹はダムに追いつけなかった。

[62] 43-44 行。

[63] 第 10 の書板　第 4 欄　118 行。

[64] 続く書板の洪水を際立たせる修辞的効果をもたせている。

[65] *An Address to the Demons* E 23-32 (G. Lambert, *AfO* 19 ,117f.).

[66] 後述する「川」の項を参照。

[67] 『嘆きの母，リシン』にも失われた息子が舟で冥界に流されていく叙述がある。また悪霊たちが舟でやってきてドゥムジを捜索する情景も川を流れて下ることを前提にすると思われる。『ドゥムジの夢』80 行参照。

[68] 7-8 行。

[69] *Humuṭ-tabal*「急いで取り去れ」を意味する。ギリシア・ローマの冥界の川

「ステュクス」の渡し守はカロンで，渡し賃を払って川を渡してもらう。イタリアでは近年に至るまで死者の口に硬貨を含ませる習慣が残っていた。

[70] 舟の形状については明らかでない。ある特定の舟のタイプ(*CAD* M/1 44b)。

[71] i-lu-ru-gu 神裁の川（生者の国と死者の国との境をなす)。

[72] *Hubur* もシュメール語からの借用語 *CAD* H 219b。『バビロニアの神義論』16-17行など。

[73] EDIN については EDIN＝*seru* から冥界を意味する。A. Haldar, *the Notion of the Desert in Sumero-Accadian and West-Semite Religions* (Uppsara, 1950).

[74] Th. Jacobsen, *Toward the Image of Tammuz*, 136-137。EDIN は URUK と BAD-TIBIRA の間に広がる荒野。同上　地図230参照。

[75] *Death of Dumuzi* 53行。

[76] 同上　45行。

[77] Th. Jacobsen, *Treasures*, 53頁より翻訳。

[78] ダムテキスト3。Th. Jacobsen, *Treasures*, 68.

[79] 注54参照。

[80] BÙRU＝*erṣetu* (Aa II/4: 110); *Penn. Sum. Dictionary* B 199.

[81]『ギルガメシュ，エンキドゥと冥界』82-83行。

[82] *CT*16 44: 88-89 シュメール・アッカド語両語呪詛文書。

[83] APA_4＝*arūtu* 粘土管。

[84] *Temple Hymns* No. 14.

[85] GIŠ. BÚR＝*gišburru* 罠。

[86] 141-143行　悪霊はドゥムジの友人に賄賂を贈って，友人の裏切り行為を引き出す。209-217行　ベリリ（ドゥムジの姉妹）はドゥムジに食事を取らせるが，家を離れると彼女もまたドゥムジを裏切る。

[87] Kutha，シュメール語名　gu-du-a^{ki}　。

[88] ネルガルの配偶神。

[89] *Balag-Composition of Nergal,* 3-8行。

[90] *Temple Hymns: TCS* III 88。